

## 審査結果の要旨

氏名 出口 剛司

本論文は、『自由からの逃走』で有名なエーリッヒ・フロムについて、その思想を、初期から後期にいたる全著作（テキスト）と、それらが書かれた歴史的社会的文化的政治的背景（コンテクスト）とにおいて問い、あくまでも内在的かつ批判的に再構成することをおして、その源泉、独自の展開、およびそれをつうじてえられた現代的意義を明らかにしようとしたものである。社会学において過去の社会理論・社会思想の研究は、その遺産を吟味し、現代的課題解決への新たなヒントや、見失われていた、あるいは新たな、問題構制（プロブレマティーク）を得るために重要であるが、本研究は自覚的な方法とその柔軟な適用とによって、その成果をとくに高めようとしている。

全体は「方法としてのディアスポラ」「排除の空間と亡命」「約束の地と倫理」「守られない約束・希望へのまなざし」という4つ部からなるが、第1部の2つの章で著者はとくに、あらためて社会学の思想性を問う必要を説くとともに、テキスト理論や言説理論などの流行のなかにかえって見失われかけているその本来の意義を回復するために、テキストとコンテクストとを一元的に、すなわち統一的に読み解いていくことの重要性を指摘する。そして第2部の3つの章では、それを実践して、第一次世界大戦後ワイマール・ドイツの歴史・社会空間に登場したユダヤ系知識人の一人フロムが、この空間の不安定性やそれへの反動としての自然主義的諸運動—文化形態学やワンダーフォーゲルなど—から距離を取るためひとたびは文化社会学に寄留しながら、ナチスの台頭にもなう亡命を機に文化とその成立基盤とを一元的に解釈する唯物論に活路を見いだしていった過程を追う。第3部の3つの章で著者が詳細に明らかにしているところによれば、この唯物論あるいは一元論は、従来の解釈のように歴史分析の不備を補うためにマルクスにフロイトを接合するといった程度のものではなく、近代初期にデカルトの二元論を批判し、精神と物体との一元性をすでに貫こうとしていたスピノザの思想をふまえた徹底的なものであり、ウェーバーの「プロ倫」テーゼを脱構築してナチズムを批判した『自由からの逃走』もこの視座のうえに初めて可能になったものであったという。そのうえで著者は最後に第4部の2つの章で、フロムがアメリカに亡命して発見した、あまりにも唯物論的になりすぎた大衆社会をさらに批判するために、後期の社会（心理）学・社会思想にかけてしだいに倫理性を強めていった経過の意義を問い、そこに彼初期の、ユダヤ思想すなわちハシディズム研究時の視点、すなわちあくまでもこの世の日常における救済を求めるがゆえに「守られない約束」つまり「希望」への思想が一貫していることを見いだしている。

本論文の功績は、こうして、悪くすれば『自由からの逃走』のみで解釈されたり、良くともそれと新フロイト主義や『希望の革命』との「乖離」などばかり強調されてきたフロムの社会学・社会思想について、その全テキストとそれらを生み出したコンテクストとの統一的な解釈をつうじて、ダイナミックな視点から、その一貫性をスピノザ、マルクス、ニーチェ、フロイトにつながる唯物論あるいは一元論として明らかにしたところにある。この視座は、テキストや言説の複雑性や細部にこだわりすぎ、かえってそこに表されるリアリティの総体性を見失いかけている現代社会学の流行の潮流への批判となっているばかりでなく、さまざまな形で人間性の崩壊とも呼ぶべき現象を経験している現代社会の諸問題の解決にも転用されうるものであろう。方法論の意義を独自に強調した第1部について、そのトーン第2部以降のそれとの違和感を指摘する意見もあったが、それもこのような文脈でみれば本研究の評価を傷つけるものとはいえない。

それゆえ、審査委員会は、本論文が博士（社会学）の学位を授与するに値すると判定する。